

文献紹介

国吉 栄 著

『関信三と近代日本の黎明——日本幼稚園史序説——』

新読書社 2005年4月

A5判 390頁 5,500円＋税

狭間 芳 樹

1876（明治9）年11月、東京女子師範学校（現在のお茶の水女子大学）に、日本最初の国立幼稚園が付設された。本書は、その幼稚園で初代学監（園長）を務めた関信三（1843-1880）という人物をつまびらかにすることを通して、近代日本における学校制度の黎明期について考察するものである。

著者によれば、明治の日本に導入された幼稚園が、どのような背景のもとで開設されるに至ったのかというその具体的な経緯は、これまで語られてこなかったという。幼稚園の開設にあたり、関信三は、その当時、入手しうるかぎりの海外の幼稚園文献に目を通し、それらを精力的に翻訳書・著作を発表するなかで、ドイツの教育者フレーベル（Friedrich Wilhelm August Fröbel, 1782-1852）により創始された「幼稚園（Kindergarten）」の概念を日本に導入した。

しかし、そうした尽力がありながら、彼の諸著作、さらに関信三という人物自身¹にも、従来ほとんど関心が払われてこなかったのである。幼稚園史の執筆を志した著者は、かねてより興味をいだいていた関について研究を進めるなかで、「保育史研究においてこれまで関信三についてほとんど顧みられなかったこと」がそもそも「奇妙な現象」（16頁）であり、関の人物像や生涯をたどることが、まさに「幼稚園を読み解く鍵」（381頁）になると考え

¹ 幼稚園開設の黎明期に尽力した人物にもかかわらず、関が「謎の人物」であったことについて、著者は、その理由が、長い「歳月が彼の姿に霞をかけた」ということにあるのではなく「彼と同じ時代に生き……ともに働いた人びとにとっても、やはり謎の人物であった」（10頁）と指摘する。実際、幼稚園での関の同僚のひとり、日本人最初の保姆（保母）として知られる豊田英雄ですら関の過去や経歴についてはほとんど聞かされていなかったという。（11頁）

るに至る。

ところで、日本キリスト教史において、関の名前が登場するのは1922年の『福音新報』紙上である。そこで植村正久は、キリスト教諜者（密偵）として暗躍した破邪僧・安藤劉太郎が関信三だと記している。

安藤劉太郎は本願寺の僧侶で寺から横浜に留学を命ぜられ、傍ら基督教の探偵をも勤めて居たのかも知れない。洗礼を受けた年の九月十三日に本願寺の法主や島地黙雷等に（通訳の為めか）随行して外国に出掛けた。彼等と共に外国基督教の模様を視察し、基督教反対の書籍を夥しく持ち帰ったやうである。……彼は其の後関信三と改名し文部省設立の東京師範学校……附属幼稚園の主任者として勤務した。此れは日本に於ける幼稚園の先祖である松野クララと共に日本に幼稚園を創立するに就いて功勞のあつた人である。（「ふるき日の事ども」『福音新報』1376号、1922年）²

17世紀初頭のキリシタン禁令以来、250余年を経て、ふたたび海外から宣教師が日本に訪れ、ひろがりつつあったキリスト教を快しとしない明治政府の意向を受けた東西本願寺の僧侶たちは、横浜や長崎の居留地に潜入し、キリスト教諜者（密偵）として活動した。安藤劉太郎、すなわち関信三もそのひとりであった。

キリスト教諜者という、いわばキリスト教に敵対する思想を持っていた者が、キリスト教思想の産物ともいえる幼稚園にどのように出会い、またその紹介発展にどのように関わったのか。関信三というひとりの人間の個人経験が、幼稚園の歴史に何をもたらしたのか。彼を通して保育史の空白領域が浮かびあがってくるのではないかと……（381頁）

しかし、そのような興味深い人物であるにもかかわらず、著者も指摘するように、仏教界、キリスト教界のいずれでも、まったくといってよいほど関心をもたれてこなかった。

関信三の全体像……生涯の軌跡は、保育史ばかりでなく、仏教史、キリスト教史、外交

² 佐波宣『植村正久と其の時代』第2巻、教文館、1976年、433頁。以下、本稿における引用中の下線ならびに、〔 〕括弧内の補足は狭間による。

なお、この記事は『横浜市史』（1932年）の「教会」の項にとりいれられ、さらに大正から昭和にかけての教育者・倉橋惣三（1882-1955）が『日本幼稚園史』（1938年）のなかで紹介したことで、関の存在は保育史研究者のなかである程度知られることとなった。さらに、1962年には、津森真が「関信三の幼稚園紹介」（『幼児の教育』第61巻2号、1962年）を公刊してから四半世紀経って、立浪澄子による研究「猶龍—安藤劉太郎—関信三の軌跡」（『日本保育学会大会研究論文集』第46号、1993年）が発表されたものの、このほかに直接関信三を扱った研究はないとのことである。（15頁）

史のなかにはっきりと刻まれているが、それらのどの分野においても、彼の姿は埋もれたままになっている。（17頁）

キリスト教課者のなかには幕末の長崎でおこった、いわゆる「浦上四番崩れ」で捕縛・移送されたキリシタンたちの説諭に携わった者（破邪僧）もあり、本書で明らかにされた諸事実はキリシタン研究にも大いに資するものである。

なお、本書で論じられた内容は、刊行前に、月刊誌『幼児の教育』（フレーベル館）において「幼稚園誕生の時代——関信三の肖像——」との表題で連載（全12回）され、大いに注目を浴び、また刊行後は日本保育学会より第43回日私幼賞・保育学文献賞を受賞するなど、保育学・幼稚園研究のみならず諸分野からの関心を集めた結果、2011年には一般読者向けの書物として『幼稚園誕生の物語——「課者」関信三とその時代』（平凡社）が出版された。さらに近年、著者はインターネット上³で「聖書献上とその周辺——大隈重信、森有礼、駐日米公使デロングは、如何にかかわったのか」（2019年12月）を公開し、そこで、本書執筆以降に明らかになった諸問題を整理するとともに、検証の結果、判明した誤りを修正している。

前掲した植村の『福音新報』以来、たとえば教育学者の海後宗臣⁴や歴史研究者の徳重浅吉⁵が文献中で関の名前を挙げているものの、それらはごく簡潔なものにすぎない。そうしたなか日本プロテスタント史学を開拓した小澤三郎によりキリスト教課者の研究が着手され、氏が戦時下の1944年に上梓した『幕末明治耶蘇教史研究』⁶のなかで関にまつわる新出史料（「安藤劉太郎の耶蘇教探索報告書」）が公表された。しかし、管見のかぎりその後本格的な研究は登場していない。したがって本書は、幼稚園・保育史研究のみならず、幕末維新期におけるキリスト教、仏教、双方の研究においてもきわめて重要な文献であり、2005年の刊本ではあるものの、いまいちど本ジャーナルにおいて紹介することにより、その意義を確認しておきたい。

本書の構成は以下のとおりである。

口絵

³ <https://kenjoseisho.webnode.jp/> そこで国吉氏は「本稿公開の目的」として、『日本幼稚園史序説——関信三と近代日本の黎明』（新読書社 2005）において述べた「献上聖書」に関わる記述の一部を訂正すること、および同書出版以降に検証した関係諸問題をひとまず整理しておくことである。すべてを明らかにするには至っていないが、現時点で明らかになっていることを公開することにより、将来、いずれの分野においてか、新たな研究が生み出されることを期待している」と述べている。

⁴ 海後宗臣「解題」『明治文化全集』第10巻・教育篇、吉野作造編、日本評論社、1928年。

⁵ 徳重浅吉「解題」『明治仏教全集』第8巻・護法篇、常磐大定編、春秋社、1935年。

⁶ 『幕末明治耶蘇教史研究』亜細亜書房、1944年。その後、1973年に日本基督教団出版局より再刊。

序章

第1章 安休寺猶龍

第2章 破邪僧として——長崎にて——

第3章 弾正台諜者として横浜へ

第4章 横浜にて——明治4年——

第5章 受洗——明治5年——

第6章 諜者安藤劉太郎と中村正直

第7章 洋行

第8章 帰国——幼稚園に会うまで——

第9章 『幼稚園記』——幼稚園との出会い——

第10章 『幼稚園記附録』——幼稚園とは何か——

第11章 『幼稚園創立法』——関信三の幼稚園——

第12章 『幼稚園法二十遊嬉』——幼稚園の普及を願って——

終章

あとがき

参考文献・資料

各章の内容については、目次からもおよそ伺えようが、大別すると、前半の第1章から第8章において関の生涯について丁寧にひもとき、明らかにした上で、後半の第9章から終章において、関の幼稚園とのかかわり、さらに著者の関心事である翻訳作業の分析がなされている。以下、概要を記す。

第1章は、かつて二度、著者が訪れた関のふるさとへの想起から始まる。三河国幡豆郡一色村（現・愛知県幡豆郡一色町）の真宗大谷派安休寺で、1843（天保14）年に生まれた猶龍（＝関信三）について、一色町には「小さな関信三伝」が存在していた。『尾参精華』（小菅廉編、名古屋市秀文社、1899年）に収録された「関新吾」という500字足らずのその小文には、12歳のときに京都の高倉学寮に進んだ猶龍が「幼にして温順能く父母の命を奉し仏学を修め京都本願寺雛僧中の秀才」と評され、郷土の偉人として記されている。またその書には、関が大谷光瑩（法名：現如、第22世法主）の洋行に随行したことや幼稚園開設の祖ということについても述べられているが、受洗をはじめ、キリスト教との関わりについては言及がなされていない（21頁）。

その理由について著者は、三河がいわゆる真宗地帯と呼ばれる地域であり、一色町だけでも約50ある仏教寺院の3分の1が真宗で、その大半が大谷派で占められていること、また、関の兄である雲英晃耀（1831-1910）が高倉学寮で講師を担ったほどの人物で、インドで成

立した論理学（因明学）を研究したほか、『護法総論』（1869年）といった反キリスト教書を執筆した破邪僧だったことをあげる。つまり、そうした立場上、猶龍が受洗したことなどの「事実」は隠さざるをえないことであり、それゆえ「故郷が関信三の経歴について知るの
は、はるか後になってからのこと」になったのではないかと推察するのである。

次いで第2章および第3章においては、京都の高倉学寮で、東本願寺の耶蘇防禦掛を務めた樋口龍温（1800-1885）のもとでキリスト教を学び、その後、長崎や横浜において破邪僧として活躍することになる猶龍の活動について丹念に解き明かされていく。たとえば、1868（慶応4）年、浦上キリシタンの教誨を願い出た東本願寺の命を受けて長崎に赴いた猶龍は、訪れた大浦の妙行寺に隣接する「堂々たる天主堂」を目にする。

安政4年、大浦郷海岸が外国人居留地に指定されて幕府の直轄地になり、しばらくのあいだ……英国領事館が置かれていたことがある。それだけでも十分困惑に値するが、今や妙行寺のすぐ上手の、敷地を接した山の斜面には堂々たる天主堂がそびえ立っていた。（49-50頁）

ここでの天主堂とは、日本二十六聖殉教者聖堂、通称、大浦天主堂のことである。そこには「先祖伝来の信仰を公然とあらわしたキリシタンたちがひきもきらず参集」しており、猶龍の「初仕事」はそうした浦上キリシタンの探索であった。なお、猶龍は、このとき知り得たことを兄・晃耀に手紙で報告し、晃耀はその手紙で知り得た情報をもって、三河の諸寺で破邪学の講義をおこなっている。その際の講義内容は、晃耀による破邪書のひとつ『護法総論』（内題「破切支丹講述」）に収められており、猶龍の手紙の内容をうかがうことができる。

切支丹ノ中ニ、耶蘇教ト天主教ト、二ハワカレテアリ。天主教ニオヒテハ、耶蘇ノ十字架ノ像丈ハ安置シテモヨシト立テ、天主堂ノ中ニ、ヤソノ十文字ノ形ニ、ハリ付ニカ、リシ像丈ヲ安置シテアレドモ、ヤソ教ノ方ニテハ、夫サヘモ、天主ノ立タル十誠ノ中ノ、偶像ヲマツルナカレト云制禁ニソムクト云ヲ免ザルコトナリ。己レノ信ズルヤソノ像サヘ安置スルコトヲ許サヌモノガ、神ハ勿論、先祖ノ位牌迄ヲ安置スルコトヲ許スノ理アラシヤ。現ニ長崎浦上ニオヒテハ、仏壇ハ勿論、戸口ニ張レル神札神棚等ヲ、コトゴトク廃除、先祖ノ位牌迄モ、ミナ破却イタルコトナリ。コレハ現ニ私ノ実弟寮司猶（遊）龍ナルモノ、本山ノ内命ヲ蒙リテ、此度長崎ノ大浦妙行寺ニ滞在セリ。夫ヨリ送り来レル述書ノ中ニ申シテアリ。⁷

⁷『明治仏教全集』（第8巻・護法篇）、260頁。なお、旧字は新字にあら

破邪学の講義である以上、晃耀が紹介する弟の手紙は、反キリスト教論が主である。しかし、兄への手紙からは、猶龍が「これまで排斥を目的とする書物を通してキリスト教に接していた」ものの、いざキリシタンたちと実際に接してみると、なかば感心することもあり、それまで邪宗として学び、自明だと信じてきたキリスト教観が覆されかねないほどの衝撃を受けたことを見てとることができるのである。

なお、著者は、こうした猶龍の調査報告の性格を次のように見ている。

彼〔＝猶龍〕は忌むべき教えを信じる、信じがたい人びとの生活を、忌避するのではなく、注意深く観察して報告した。そして、彼らの志操堅固なことも伝えている。猶龍はこれ以降多くの報告書を書くことになるが、その最初から、事態を冷静に知ろうとする姿勢があったことに注目しておきたい。（54頁）

さて、第3章から第5章では、安藤劉太郎として東本願寺より横浜への留学を命じられた関と、アメリカ・オランダ改革派教会派遣のアメリカ人宣教師バラ（James Hamilton Ballagh、1832-1920）との出会いをはじめとした横浜での動向、そして日本初のプロテスタント教会として日本基督教会が設立された1872年に、関信三を含めた9名の日本人がバラより洗礼を受けたことなどが詳述される。

そして第6章は、明治の啓蒙思想家・教育者として知られる中村正直（1832-1891）との出会いである。関が横浜に着任してから半年ほどが過ぎたころ、バラの呼びかけによって「米国婦人一致外国伝道協会」より派遣されたプライン（Mary Putnam Pruyn、1820-1885）ら3人のアメリカ人婦人宣教師が横浜港に到着した。そして、外国の女性をキリスト教により教化教育することを目的として設立された超教派組織のその活動のひとつとして開設されたのがアメリカン・ミッションホーム（後の横浜共立学園）である。関は、そこでの祈祷会に参加し、婦人宣教師の活動を厳しく監視しつづけていた。

そうしたなか関を驚愕させたのが、匿名の西洋人が天皇へ上書するという体裁をとった、ある文書である。そこには「日本はあらゆる分野で西洋文明を取り入れているが、その根本を取り入れている。真に西欧諸国と互角に並ぶためには、天皇みずからが率先して西欧の根本であるキリスト教の洗礼を受けるべき」（136頁）との主旨がつづられていた。この文書は、その後、*The Japan Weekly Mail*（1872年5月11日）に掲載されたことで、英字紙を読む人びとの間でひろく知られることになったほか、同年の邦字紙の『新聞雑誌』第56号（1872年8月）の附録に全文が転載されている。匿名とはいえ、諜者報告書にはすでに著者

ためた。

が中村正直であると報告されており、その通報をおこなったのが、まさに安藤劉太郎、すなわち関であった。中村はその後、東京女子師範学校で摂理（校長）を務め、関は幼稚園学監として再会することになるが、その最初の出会いは、こうした敵対関係であった。

中村が、上記アメリカン・ミッションホームに自らの娘たちを入学させたことをはじめ、キリスト教に対する親和的な姿勢に危機感を募らせた安藤は諜者報告書でそのことを政府に知らせるとともに、次のように警鐘を鳴らした。

右学校（アメリカン・ミッションホーム）ハ教授中村敬三管轄致シ居候処同人ハ三日奉呈置候外臣某之建白ヲ認候ニ而余程彼教之為メ尽力致シ候由ニ御座候（137頁）

もっとも、こうした報告が届けられながらも、政府は結果的にキリスト教の宣教は黙許し、日本での宣教師たちの活動は日ごとに拡大し、人びとのなかで受け容れられていく。キリスト教の国内での拡がりの阻止という重責を担っていた諜者にとって、彼らに与えられた破邪という目的は、今や「虚しいもの」になりつつあった。そうしたなか、関にとって、大きな転機がおとずれる。それが「洋行」（第7章）と「帰国」（第8章）である。

1872年、東本願寺法主・現如は洋行、すなわち海外事情視察をおこなうが、その際随行したひとりが安藤であった。この洋行について、東本願寺側では、たとえば明治から大正期に活躍した仏教学者・南條文雄（1849-1927）が次のように記している。

この月十三日、新法主現如上人（諱は光瑩）は……横浜を發し、歐洲へ見学視察の途に上られた。随行として松本^{しろでる}白華、石川^{つねひろ}倫弘、成島柳北、関信三の四人が撰ばれた。松本は加賀松任の本誓寺に生れ、能書家で詩文をよくした。……石川倫弘は舜台君で、きよてるとかつねひろといふ名乗りは旅行免状を貰ふに就いて、宮内省か外務省あたりで考へて呉れた名乗りなのである。……最後の関信三君は高倉学寮では猶龍と云ふ名であつた。後の因明院雲英晃曜……の弟で三河国一色……に生れた人であつた。……以上随行した四人のうち、翌年七月新法主と一緒に帰朝したのは松本白華氏一人であつた。成島、石川の二氏は北米へ廻つて帰朝したし、関信三氏だけは英国に残つたからである。⁸

ここに見られる松本^{はつか}白華とは、加賀国松任の大谷派寺院・本誓寺（現・石川県白山市）の僧侶であり、1869年に明治政府の命により弾正台の御用掛、さらに1872年以降、教部省に出仕したことを受け、還俗したこともある人物である（その後、1877年に僧籍復帰）。

上記、南条のものをはじめ、大谷光瑩の洋行については、さまざまな文献でも伝えられる

⁸ 南條文雄『懷旧録』平凡社、1927年。

ものの、洋行先、歴訪したヨーロッパ各国での足跡の詳細を知りうる資料はとぼしい。⁹ そうしたなか、松本が書きのこした『白華航海録』¹⁰を見ると、随伴した僧侶たちと現如との間で確執があったことが確認できる。著者、国吉氏も松本の航海録に注目し、関が、日本に帰国せず、キリスト教を学ぶために英国へと向かったことなどについての考察が進められる。英国における関の動向は、従来ほとんど知られていないが、著者は複数の史料を比較考証することで留学先を特定している。

ところで、関が英国滞在中の1873年2月、日本ではキリシタン禁制の高札が撤去された。これについて著者は以下のような見解を示している。

キリスト教解禁決定は関信三にとって決定的な意味を持っていた……彼の「留学」の目的が、キリスト教およびキリスト教国について知りたいという、一般的あるいは学問的関心に根ざしたものではなかったことを示している。大前提が崩れたとき、彼にとって……キリスト教の神学校に学ぶ理由は失われたのである。（161頁）

先に見たように、洋行前の国内では中村正直の「建白書」に驚かされ、そして今度は、英国滞在中に高札撤去の報せを受けた安藤にとって、いよいよ破邪僧としての最大の目的が失われたのであった。もっとも、著者はこのときの安藤の心情について、「キリスト教解禁後、関信三の心を最も悩ませたのは、キリスト教の問題でも、異文化の問題でも、本国の宗教政策の問題でもなく、彼が属し、そのために働いてきた集団の問題であったということは、彼にとって重要な意味を持っている」（168頁）と推察し、次のように考察する。

彼が謀者という没個性の黒子として生きることをみずからに課したのは、幕末以来、彼が、本山、すなわち法主に対して、ロイヤリティーを保ち続けていたからにほかならない。真宗における法主と一般僧侶との関係は、幕藩体制における武士の、主君に対する忠に近いものがある。宗教集団として鎌倉以来の歴史を持つ真宗教団は、宗祖親鸞の法灯を「血脈」、すなわち血縁関係によって伝承することによって、他の仏教集団とは異なる教団形成をとげてきた。その意味では、法主の絶対性は、時に他家から養子を迎えることも辞さなかった幕藩体制以上のものである。血脈と信仰が結びついているという点では、天皇制により近いのではないか。（168頁）

⁹ 洋行は東本願寺に先んじて西本願寺（本願寺派）がおこない、ヨーロッパ滞在中に「三条教則批判建白書」を執筆したことで知られる島地黙雷についての研究は、すでに蓄積されているが、東本願寺の洋行に関する研究はあまり進んでいない。なお、島地の航海録『航西日策』などの資料には、ヨーロッパでの大谷派との交流についても記録がのこされている。

¹⁰ 徳重浅吉翻刻『松本白華航海録』大谷大学国文学会、東林書房、1932年。

そして「ここにおいて関信三と幼稚園が結びついてくる」と著者はいうのである。すなわちキリスト教を防禦するという課者としての役割はこのあと潰えるものの、その当時「真宗教団のみならず、開国日本にとって、海外の知識を取り入れることは最大の急務」とされるなか、関は「破邪僧から太政官課者という特異な経歴を通して獲得した語学力をもって、キリスト教思想の産物であるフレーベルの幼稚園と出会う」ことになるからである。

関信三がいつ幼稚園の理論と実際に出会ったか、ということは大変興味ある問題である。保育史においては、従来、関信三は在英中に幼稚園について知見を得たとされてきた。もしそれが事実だとすれば、最初の留学地レディング、あるいは次に移ったブロッケレー、または最後に暮らしたロンドンで、ということになるだろう。フレーベルの幼稚園は特別な関心があれば出会いにくいものであるから、彼が実際に幼稚園を見聞したとすれば、現地で彼を受け入れてくれた教会や家庭を通して、ということが最も考えやすい。しかし、仮にそのような機会があったとしても……「留学」の事情からみて、彼が幼稚園について積極的な関心を持ったり、学んだりした可能性はきわめて低い。のちに取りあげる彼の著作の中にも、彼が幼稚園創設以前に幼稚園について何らかの知識を持っていたことを示す根拠を見出すことはできない。これらのことからすれば、関信三は、帰国後、文部省に関係して初めて幼稚園というものに会った、と考えるのが妥当であろう。（184頁）

1873年11月、ロンドンを発った関は、帰国後の1874年4月にキリスト教課者を辞任するとともに還俗する。その後、彼が東京女子師範学校の訓導（正教員）、さらに幼稚園の監事になるのは1877年のことであるが、その間、1875年1月、東京英語学校の教員として採用された関が編訳し、同年7月に脱稿したのが『古今万国英婦列伝』であった。

同書は、女子師範学校の開設にあたり、「先進海外の優れた婦人たちを紹介する啓蒙的な書」を依頼された関が、編纂・翻訳したものである。その冒頭「小引並凡例」には「近世西洋各国に於いて文人学士の間に男女同権の説盛んに起これり。唯其説の起るのみならず既に英国に在ては一種の會社ありて其説を主張し殊に瑞西國政府に於ては婦人擢用の美挙あり」と記している。

「男女同権」という語は当時の日本では耳新しい言葉であったものの、知識人のなかではそれを語ることが一種の流行のような観もあった（191頁）。当時、森有礼の「妻妾論」（『明六雑誌』第8号、他）を契機として明六社でも盛んに論じられていた「男女同権」については、福沢諭吉の『学問のすすめ』（第8編「世に生まれたる者は男も人なり女も人な

り」、1874年）、「男女同数論」（『明六雑誌』第31号、1875年3月15日）などが登場しているが、著者は「関信三の説もこれらの識者の論とまったく同時代の説」であるものの、関のそれは「森有礼や福沢諭吉のように男女同権を一夫一婦制の問題」（191頁）として論じてはいないという。

あるいは、中村正直の「男女ノ教養ハ同等ナルベシ」なる文言を含む「善良ナル母ヲ造ル説」（『明六雑誌』第33号）にしても、そこで中村が説いた「子を産み育てることによって間接的に社会に貢献する存在として女子教育の必要」を論じたものでもなく、関は「女性を、直接に「能く国を富し兵を強うし民風を化し土功を興す等の雄功」の可能性を持つ存在として論じた」のであって、そこから男女の区別無く「其天賦固有の良材を養成せは獨り国家の美観のみに非ず其公益たる豈大ならずや」という彼の教育論が生まれたと論じている。

つまり関の考え方は、当時の他の論客とは一線を画し、関の場合、男女同権を一夫一婦制、あるいは女性を「男女、夫婦、母子」といった他者との関係性においてではなく、「独立した個としての人間」という観点から論じられたものなのであった。

予か此三女を書中に編伍する所以は、婦人にして雄才大畧萬古に卓越するものあるを表出し、男子にして婦人を蔑視するの癖を去らしめ、婦人をして亦た自棄する弊を脱せしめ、其氣風を伸し、其意志を壮にし、其度量を弘め、其才智を拡充せしめんことを希望するなり。（192頁）

したがって『古今万国英婦列伝』でとりあげた10人の女性についても、関は「女性のいわゆる女性性にではなく、人間としての彼女たちの能力に強い関心を抱いていた」（196頁）のではないかと著者は推察するのである。

なお、この書の原稿を書き上げた際、関がとりあげた10人のうち、3人の女性、たとえば古代オリエントの伝説上の女王セミラミスが夫を毒殺した話など、「驕奢・淫逸・殺逆」なところがあるため啓蒙書のなかでとりあげるのは相応しくないとの異議がとなえられた。これに対し、関は、彼女らに非難されるべきところが多いことは認めながらも、「驕奢・淫逸・殺逆」と断罪し、「その全存在を葬り去ろうとする」姿勢を、「自分とは異なる価値観を持った存在を受け入れない、偏狭な排他主義」だとして抗ったのであるが、著者は、さらに次のように論じる。

関信三は……『古今万国英婦列伝』に「唯国家人民ノ富強幸福ハ教法ヲ尊信シ人民ノ自由ヲ保存スルニ在ルコトヲ信」ず、と書いた。彼は、国家および人民の富強幸福の根本は信仰の自由にあるととらえたのである。当時の日本において、このような国家観を描

いた者が、彼のほかにあったであろうか。（357頁）

また「その根底には、人民の信仰の自由を禁止・抑圧することによって体制の維持を図った国家と、その一翼をになった自分自身に対する、徹底した凝視があったとみなければならぬ」と指摘した上で、「信仰の自由とは、国家による信仰統制、強要の排除であり、個々人の全き尊重にほかならない」こと、「関信三は人民をマスとして扱うのではなく、一人ひとりの人間として認めることを求めた」（357頁）と強調する。そのうえで「キリスト教禁制こそ解かれたものの、依然として信教の自由が認められていなかった時代に、この洞察に至らしめた彼の生涯を抜きにして、関信三の幼稚園を考えることはできない」との見解が示される。

こうした関の国家観と、まさに合致するものがフレーベルの教育思想であった。フレーベルは、「植物が種子のなかに未来の姿を秘めているように」すべての人間には、生まれたときすでに「造物主なる神の神性」が宿っていることを指摘し、それゆえ人間は何の妨げもないときには善であると主著『人の教育』（1826年）において論じるなかで、幼児期の遊びの重要性を説き、また、「子どもの自発的な活動を尊重し、子どもの内的表現を助けはぐくむための教育遊具の考案と作成にとりかかった」（238頁）。そして、そのような考えのもと、フレーベルによって考案されたのが独創的かつ体系的な遊具であり、フレーベルは「この遊具に Gabe という名を与えた（「神からの贈物」という意味で、英語では Gift と訳され、関は「恩物」と訳した）。

その後、1839年、フレーベルは、母親や指導者たちを対象に恩物を用いた講習会をひらき、その実習施設として、村の6歳以下の子どもたちを集めた「遊戯及び作業教育所」を設けると、その翌年、この施設はフレーベルにより「一般ドイツ幼稚園（Der allgemein deutsche Kindergarten）」と命名され、これが幼稚園の始まりとなった。

こうしてフレーベルによって幼稚園が創設された8年後の1848年、フランス革命（二月革命）がおこると、オーストリアやチェコなどの周辺諸国においても波及し、オーストリアでは、30年間にわたり保守反動勢力の指導者として、自由主義・民族主義運動を弾圧してきたメッテルニヒ（Klemens Wenzel Lothar Nepomuk von Metternich-Winneburg zu Beilstein, 1773-1859）が失脚する。またベルリンでは市民、労働者が蜂起し、自由主義的なカンプハウゼン内閣が成立、国民議会の発足、新憲法草案が発表されるに至る。ところが、そうした革命の流れは、プロイセン軍に鎮圧され、1851年にはフレーベルの幼稚園も、反政府的なものだと見なされ、活動が禁じられる。これに対し、園の再開に奔走したフレーベルはまず政府、次いでプロイセン王ヴィルヘルム4世（Friedrich Wilhelm IV、在位：1840-1861）に、次のように訴えかけた。

私の名においてではなく、子どもの名において、国王陛下に申し上げます。……習俗や法律や宗教のための新しい人間教育の芽を踏みつけないでいただきたい。この芽を国王の強大な保護の下におき、それをすくよかに伸び、さらにこうして不可欠な人類の再生を招来するために貢献できますようにして下さいませ。¹¹

もっとも、どちらへの誓願も聞き入れられることはなく、そこでフレーベルはアメリカへ移住し幼稚園を開くことを企図したが、それが実現する前に没した。なお、その後、アメリカに渡ったマーガレット・シュルツ（Margaret Schulze）により、アメリカ最初の幼稚園が開設され、またシュルツの姉妹であるベルタ・ロンゲとその夫ヨハネス・ロンゲはイギリスにおける幼稚園の普及に大きく貢献することとなる。そして、関によって翻訳された日本で最初の幼稚園のテキスト『幼稚園記』の原著 *The Kindergarten* の執筆者であり、奴隷制度廃止論者としても知られるドイツの社会改革家アドルフ・ドゥアイ（Adolf Douai, 1819-1888）といった、まさに「自由を求めて各地に渡った政治亡命者たち」により、幼稚園は世界へと広がり、日本にも伝えられることとなった。

ところで、「初期の幼稚園はフレーベルとは名ばかりで、実際にはフレーベルに学んでいなかった、というのが保育史における一般的な評価」¹² であるという。確かにフレーベルの著作の英語訳が出たのは関が亡くなってから後のことであり、関は生前、読んでおらず、あくまでもドゥアイの著作を通して、フレーベルに思想を学んでいたにすぎない。しかも、ドゥアイはフレーベルの教育原理（241頁）に基づいた幼稚園論を展開した一方で、その後次第に、フレーベルの論とは距離を置き（247頁）、つまり *The Kindergarten* を執筆したころには、すでにドゥアイ自身の教育論が反映されていたのである。この点について国吉氏は本書の「終章」で次のように述べている。

幼稚園の指針となすべく選ばれた文献は、当事者たちは気づいていなかったが、フレーベルの幼稚園そのものを紹介しようとした書物ではなかった。けれども、最初にドゥアイに出会ったことによって彼を幼稚園理論指導者として認識した関信三は、ドゥアイの指導に従って幼稚園を紹介していった。（356頁）

そして、著者は以下のような結論を導出する。

¹¹ 小笠原道雄『フレーベルとその時代』玉川大学出版部、1994年、410-411頁。

¹² 国吉栄『幼稚園誕生の物語——「謀者」関信三とその時代』平凡社、2011年、222頁。

最初に出会った文献と、翻訳に関わるさまざまな歴史的文化的要素に加え、おそらくそれ以上に幼稚園紹介の内容を決定づけたのは、翻訳者であった。……翻訳する者は対象を自分に引き寄せて訳す。関信三の翻訳にも、これまでみてきたように、訳語の選択、文章の加筆・削除、誤訳の傾向、理解の深度、「園説」の構成……など、細部から全容にわたるまで、個人としての彼自身が強くあらわれていた。その多くは翻訳という作業に伴って生じた無意識の結果であったが、しかしその背後には、彼を採用した人びとの思惑を超えて、幼稚園を主体的に完成させようとした彼の堅固な意志があった。彼は単に外国文献を翻訳したのではなく、翻訳そのものに直接介入し、日本の幼稚園を造ろうとしていた。（356頁）

著者は、「これまで言及されたことはなかったが、日本の幼稚園の始まりの形を決めた最大の要因は翻訳であり、かつその翻訳者が関信三であった」（355頁）ことに意義を見いだした上で「海外文献が直接日本の幼稚園のテキストになったのではない。関信三というひとりの人間によって消化されたものがテキストとなって、日本に幼稚園が広まっていった。従って、彼が原典をどのように翻訳していたかを知ることは、保育史研究においてとりわけ重要である」（202頁）ことを指摘する。

このことをよくうかがわせるのが、関の「園長」観である。

彼の考えでは、園長に「洋学力」が必要なのは、外国の教育法を模倣するためではなかった。外国文献を紹介すれば、それで仕事が終わるのでもなかった。園長には、外国で生まれ、世界でおこなわれている未完の教育法を、わが国で改良し、完成に至らしめる任務がある。世界のなかに生きる日本の視点である。そのための手段として、園長は「多少洋学力アル者ヲ要ス」のである。（320頁）

すでに見たように、関が幼稚園教育に携わることになったのは、譯者活動などで修得した語学力にあった。そして、フレーベルの教育思想に出会った関は、入手しうるかぎりの幼稚園文献を読み始め、精力的に翻訳していく。その最初のものとして選ばれたのがドゥアイの *The Kindergarten.—A Manual for the Introduction of Fröbel's System of Primary Education into the Public Schools; and for the use of Mothers and Private Teachers, 1871.*（幼稚園——フレーベルの初等教育の方法を公立学校に導入するための手引き；および母親や私立幼稚園教師のための手引き）であり、1876年7月に『幼稚園記』（巻之一、二、三）の3巻が東京女子師範学校から出版され、翻訳に際し、関は『幼稚園記』との邦題を与えている。最初にこの書が選ばれた理由は、いうまでもなく「フレーベルの初等教育の方法を公立学校に導入するための手

引き」という副題にうかがえ、その背景には、1872年の学制公布により、教育を通して新国家の建設を図ろうとする当時の政権による基本方針が示されていたところにあった。

また、1877年には『幼稚園記附録』、翌年以降『幼稚園創立法』（1878年）、『幼稚園法二十遊嬉』（1879年）と、関は年毎に新たな幼稚園書を発表していく。しかし、そうした活動において彼がおこなったのは、海外の文献を単に翻訳するというものではなかったのである。

第10章では、『幼稚園記』のちょうど一年後の1877年に出版された『幼稚園記附録』について考察がなされる。この書の原典が、アメリカ国内で最初に英語で書かれた幼稚園案内書であるピーボディー（Elizabeth Palmer Peabody、1804-1894）らの手による *Moral Culture of Infancy and Kindergarten Guide, with Music for the Plays, 1876* であることはひろく知られているが、著者は関自身が「此……ハ亜米利加合衆国州師範学校教頭ウェルチ氏ノ撰述セン物体教科ヨリ抄訳シ…」（『幼稚園記附録』、64頁）と記していることに注目し、このほかにもウェルチ（Adonijah Strong Welch、1821-1889）の *Object Lessons Prepared for Teachers and Primary Classes, 1873* が原典となっていることを明らかにする。そして、こうした二つの原典があることをもって、関がドゥアイの推薦する書物を補完することで『幼稚園記』を完成させようと考えていたことを確認するのである。

しかし、著者はピーボディーの原著と『幼稚園記附録』とを比較検証するなかで、「パラグラフを途中までしか訳していな」かったり、「途中で切り上げた文章に、別の文章をつなげる」など、「翻訳というより、むしろ創作に近い」箇所が散見されることに気づかされる。一例をあげると、「初期の幼稚園でよく用いられた遊戯の素材と実践例」が述べられている「第3章（戯劇）」においても原文と関による訳文との間に「全体に大きなずれがある」ことを指摘する。すなわち、そこで科学的知識が与えられる前にまず道徳的訓練がなされなければならない、というピーボディーの説が「其物体ニ感覚セン識力ノ増益スルトキ知ラス識ラス心思錬磨ノ域ニ達セントス」と訳述されて、原著の内容がすっかり変わってしまっているのである。ここでの「変化した要因」について、著者は、原著の「moral training」の訳に（「時間をかけて到達される」という語感を持つ「錬磨」という語を用いた）「心思錬磨」という語を採用した結果、意図しないまま原意から離れてしまったと見る。ならば、たとえば「道徳訓練」と訳すべきであったのかといえ、それもまた重大な問題があるという。その理由は、ピーボディーのいうmoralは「道徳」で置き換えることができない内容をもってしているからである。

moralも「道徳」も、ともに背後に規範が存在するが、それぞれの規範はまったく違う。ピーボディーがmoralという時、そこには一神教の神がある。それを「道徳」と訳

すと、たちまち一神教の神が消え、儒教的規範が入れ替わり浮上してくる。自分たちが持っていないものに名前を与えると、私たちは持っているものの中からそれにふさわしい名前を探そうとする。そのときに無意識のうちにおこなわれる座標軸の大転換。これは開国まもない関信三の時代だけでなく、今日でも厳然と存在する問題である。
(272-273頁)

関信三の時代には、moralには「道德」という語はあてられていなかったことは、日本最初の英和辞書『英和对訳袖珍辞書』（1862年）で、moralが「礼式、式作法ノ教」と訳されていることにはうかがえるが、ともあれ関が「心思錬磨」という語を採用したのはどのような理由によるのであろうか。著者は次のように推察する。

「心思錬磨」は仏教的思考を思わせる語である。彼はmoralを「礼式、式作法ノ教」という外側をあらわす語としてではなく、「心思」「良心」という心の内側をあらわす語としてとらえていた。一般に仏教においては、「心思」を最高の状態に到達せしめるために修行がおこなわれる。それは一朝一夕にできることではなく、長い時間を必要とする。しかも、それは意識して得られるものではない。彼が訳しているように、「知ラス識ラス心思錬磨ノ域ニ達セン」という境地なのである。（273-274頁）

このことは訳語にも見うけられる。たとえば関は、先述したように、フレーベルが考案した系統的な遊具「Gabe」の英訳である「Gift」に「恩物」という訳語を与えた。これについてフレーベルの研究者、荘司雅子氏は、関が「熱心な仏教徒であったから仏教的なニュアンスのもつ訳語となっている」¹³ との見解を示している。確かに「恩物」という語には、仏教的ニュアンスが感じられるものの、こうした見解に対して著者は、関が「このとき熱心な仏教徒であったかどうかは不明」であること、そして「少なくとも、彼が意識的に仏教的ニュアンスをもつ語を選んだようには思われない」との見方を示し、その理由として関の翻訳に見られる「敬神愛国」という語に注目する。すなわち、

「敬神愛国」という表現の底辺にあったのは、仏教思想では……なく、キリスト教思想の支持でもなく、漢文的表現に対する支持であったと思われる。その漢文的表現が彼に仏教とキリスト教との橋渡しをした。……彼が選択した言葉、たとえば「心思錬磨」という漢文的表現が、それ自体のなかに座標の転換の契機を含んでいる。本来キリスト教の思想を内包していた幼稚園は、関信三というひとりの人間を通り抜けることによっ

¹³ 荘司雅子監修『フレーベルの生涯と活動』玉川大学出版部、1982年、93頁。

て、目に見えない変換を遂げたのである。(281頁)

そこで次に著者は、関が「キリスト教思想を排して仏教思想を盛り込むために、こうした用語を選択したのであろうか」と問いかけた上で、関の思想が単純なキリスト教排除にあったのではないことを導こうとする。すなわち、本稿の123頁で紹介した兄・晃曜にあてた手紙のなかでも関が記していたように、彼は実際にキリシタンたちに接したとき、自明であったはずのキリスト教観が揺らいだという話である。

「切支丹はよき宗旨なりと、領主・地頭にも思はせん為に如此謹慎致し候由」であり、世間をあざむく偽りの姿である、と人も言い、関もまたそう信じていた。しかし、禁教下の日本を後にした時、その前提は崩れざるを得ない。いざ敵の牙城に乗り込んでみれば、そこは地獄のような世界ではなく、秩序と繁栄と力の世界であった。また、(英国の)レディングにおいて親しく身の配慮をしてくれた人びとのなかに、人間的な魅力を見出したこともあったのであろう。関信三は英国での生活を通して、キリスト教も(仏教と同じように)邪教ではないと認める方向に進んだのではないかと思われる。キリスト教は邪教ではない。それが持つ良いところは認めよう、いや、是非とも認めなければならない、と。(276頁)

以上、本書の概観をおこなってきた。著者は本書刊行後の2011年に上梓した『幼稚園誕生の物語——「諜者」関信三とその時代』のなかで、従来、関信三の生涯に光が当てられることはなかった結果、「ステレオタイプ化した幼稚園像が描かれ続けてきた。関信三は「発見」されないまま、その後も長く埋もれたままになっていた」と述べ、また研究の進展が阻まれてきた「根本的理由」としては、著者は次のように分析する。

関信三研究の進展を阻んできた根本的な理由は、彼の諜者としての経歴の重要性がほとんど認識されてなかったことにあった。わが国においては、西欧思想の受容等に関する研究においてキリスト教に関わる諸問題を捨象してなされる傾向が強く、ひとり幼稚園史だけの問題ではないが、こうした一般的態度が関信三の幼児教育史における重要性の発見を遅らせていた。¹⁴

本書は結論として、次のように締めくくられている。

¹⁴『幼稚園誕生の物語——「諜者」関信三とその時代』平凡社、2011年、220頁。

関信三は、故郷を離れ、寄留者として東京に没した。彼は寄留者であったが、ただ他郷に住み、あるいは他家に身を寄せるという物理的な意味だけでの寄留者ではなかった。彼はあらゆる意味で寄留者であった。

しかし、それは故郷の人びとが言うように、「あの人はキリスト教の方へ行ったから」というのがその理由ではない。また、同じく故郷の人びとが言ったように、「ミイラ取りがミイラになった」わけでもない。彼はキリスト教を受け入れたが、それはみずからの信仰としてではなく、相対化した、という意味においてであった。と同時に、彼はその前半生を捧げた教団と郷里の信仰をも相対化したのである。また、かれは、新しい国の在り方についても、国家と宗教との関係、すなわち、国家による個人の支配の問題が解決されなければならないと考えていた。これは、故郷ばかりでなく、当時の社会にも、とうてい理解される立場ではなかったであろう。彼は、切支丹邪宗門禁制の時代に生き、未だ葬送の自由のない時代に死んだ。寄留者という在り方は、近代日本の黎明期を身をもって生きた関信三の生涯を象徴する姿ではなかったろうか。（378-379頁）

関のように、キリスト教諛者としての活動を進めるために、受洗した破邪僧のほとんどは寺に戻り、僧侶として生涯を過ごしていった。しかし、関は宗門と距離を置き、かといって篤信なキリスト教徒になったというわけでもない。つまり、どちらも選ばなかったのである。そうした関を形容するにあたり、著者が最終的に「寄留者」と表現することは非常に示唆深く感じられる。

無論、キリスト教由来の幼稚園での活動に専心することになった以上、キリスト教へ接近したことは間違いないが、なによりも関の心を大きく動かしたのは、幼稚園関係文献を通してのフレーベルの思想であった。自由主義運動の勃興とともにフレーベルの幼稚園がひろがりゆくように思われたヨーロッパにおいて、ドイツやオーストリアなどでそれが反政府的なものだと見なされ、活動が禁じられことは当時の日本の様相とも重なり映るものである。すなわち、近代という新たな時代が到来するその黎明期において、明治政府が欧米の教育制度に倣った学制を布くことになったとはいえ、その内実は到底、自由主義に根ざすものではなく、しかも、東西本願寺はそれに積極的に加担したのである。そうした宗門の行く末に、関が仏教の限界を感じ、悲嘆したことは想像に難くない。

関信三や松本白華といった破邪僧が養成された東本願寺の護法場で、外学（キリスト教）について講じたのは、宗門で耶蘇防禦掛を務めた樋口龍温（香山院龍温、1800-1885）であった。旧約・新約の漢文聖書（1855年に香港英華書院で印刷・刊行された、いわゆる「代表訳本」）をはじめ、当時はまだ禁書扱いであったキリスト教ならびに西洋の諸宗教、科学などの多岐にわたる書物を数多く収集し、独自にキリスト教研究を進めた樋口は『關邪護法論』

(1863年)や『総斥排仏弁』(1865年)といった破邪書を著したが、なかでも門下の筆録(講義ノート)として遺された『急策文』(1863年)¹⁵には、単に反キリスト教を説くのではなく、自らの宗門である仏教についても旧来の在り方を論駁し、むしろキリスト教からも学ぶべきことは学ぶべきことが説かれている。¹⁶ このことを想起するなら、著者が推察するように、関が英国での生活を通して「キリスト教も(仏教と同じように)邪教ではないと認める方向に進んだのではないか」「キリスト教は邪教ではない。それが持つ良いところは認めよう、いや、是非とも認めなければならない」(276頁)というのは大いに首肯できるものであり、関の思想形成には樋口のキリスト教観が透けて見えるように感じられてならない。

キリシタン研究においては、近年、「民衆」「一般信徒」という視座¹⁷が重視されている。なかでもキリシタン民衆の殉教——そのひとつ、浦上四番崩れの後、諸藩(諸県)に移送された信徒たちのなかから殉教者が輩出されたことにしても、彼らのキリスト教理解、信仰の内実を明らかにすることは、史料的制約もあり、非常に難しい問題である。しかし、彼らに実際に接し、説諭を担った破邪僧がキリシタンの信仰を如何に理解したのかを知ることができれば、その解明にあたり大きな手がかりとなる。関信三という人物を明らかにすることは、そうしたキリシタン研究の難題にも糸口を与えることになるだろう。

これまでほとんど注目されてこなかった関信三に焦点をあて、その生涯と思想形成をたどった本書は、いわば評伝といってよいものである。思想史研究の諸問題のひとつとして、「評伝研究の問題性に留意しつつも、良質の評伝の存在が思想史研究にとってきわめて重要な意味をもつことは否定できない」と指摘する芦名定道氏は、評伝研究が「入門的通俗的な紹介にとどまらず、思想を歴史のコンテクストに位置づける上で重要な役割を果たすこと、そして「優れた評伝研究の存在は、思想研究あるいは思想史研究の確実な基盤となる」¹⁸

¹⁵ 『急策文』:『明治仏教全集』(第8巻・護法篇)、31-38頁。

¹⁶ なお、樋口の破邪観については本研究会の電子ジャーナル所収の拙稿「維新期における反耶蘇論とナショナリズム——樋口龍温の護法論を中心に」(『アジア・キリスト教・多元性』第16号、2018年)、また、狭間芳樹「近世・近代における反キリスト教論の系譜」『宗教の融合と分離・衝突』(日本宗教史3、伊藤聡・吉田一彦編、吉川弘文館、2020年)、同「井上円了の護法論とキリスト教——破邪・顕正と新たな仏教の模索」(『キリスト教史学』第74号、キリスト教史学会、2020年)を参照。

¹⁷ キリシタン民衆の視座からの代表的な研究としては次のものがある。大橋幸泰『キリシタン民衆史の研究』(東京堂出版、2001年)、川村信三『キリシタン信徒組織の誕生と変容——「コンフラリヤ」から「こんふらりや」へ』(キリシタン研究・第40輯、教文館、2003年)、東馬場郁生『きりしたん受容史——教えと信仰と実践の諸相』(キリシタン研究・第50輯、教文館、2018年)、狭間芳樹「キリシタン信仰と宗教の民衆化——死生観に見るキリスト教受容の様相」『キリシタン歴史探求の現在と未来』(川村信三編、キリスト教史学会監修、教文館、2021年)。

¹⁸ 芦名定道「思想史研究の諸問題——近代日本のキリスト教思想研究から——」『アジア・キリスト教・多元性』第10号、2012年、4-6頁。

との見解を示しているが、その意味で、国吉氏の研究成果をもって今後、評伝研究を進めることが求められる。

本稿の冒頭で紹介した「聖書献上とその周辺」（2019年12月）において、国吉氏は「現時点で明らかになっていることを公開することにより、将来、いずれの分野においてか、新たな研究が生み出されることを期待している」と述べているが、精緻な調査と考察を通して本書で明らかにされた研究成果は、幼稚園史のみならず日本仏教史、日本キリスト教史の進展にも大きく寄与するものだといえるのである。

（はざま・よしき 大谷大学特別研究員、京都女子大学非常勤講師）